蝦夷風俗彙纂前編

三

ヲ 6
460
3

門ヲ呂6
號460
巻53

蝦夷風俗彙纂前編巻三目次

○人物

智勇　ツキノエ
豪勇　精一郎
同　カニクシアイノ
同　ムネトク
同　トイカライン
同　トセツコラン　ヤエタルコハ
同　シヤケロク　サンケトモ
義徒　ネシコマケ

同　マウタラケ
同　シモチ
同　イニンカリ
同　ポロヤ
同　イコリカヤニ
同　シヨンコ
同　ヤエケシユク
同　ケンヂロ
同　イコトイ
同　シキシマ

同　ノチクサ
孝子　エタキウエン
同　コトレ
同　コレマカ忰三人
同　ベロ　龜松
同　アベハナ
同　孝多
烈女　モレツシ
同　チキリアシカイ
同　ウエテマツ

同　イムキマツ
奇術　イコランケシ
同　センアツイ
同　ケブチカ母
同　クウシユイ

蝦夷風俗彙纂前編卷三目次終

蝦夷風俗彙纂前編卷三

○人物

○智勇　ツキノエ

ツキノエは北嶋國(クナシリ)後近邊總部の酋長なり。身は丈六尺有餘。眉目麗秀(ヒモノレイシウ)膂力(リヨリヨク)出群(イテグンヲ)。年七十に滿てり。少壯の時既に跋扈の名あり。故に夷方よりして異國北蠻(ホクバン)

蝦夷東北極は諸嶋を過ぎ。北蠻は異國より東南海に突出(トツシユツ)せる所を。東察加と云。此處の北に大沼あり

て。鴻鴈雛我産せ。其地の總名を露西亞（オロシア）と云。近世地理我學ぶ者ハ所謂カムシカツトカを。此突出（トツシユツ）せる南方ハ地を云なり。是即モスカ國砦地なり。蓋しモスカを即モスカビア國の本國なり

といへども。其勇名我しらざるもの稀なり。客歳夏五月北嶋騒動の時を。初夏より北方ハ諸嶋に在て。實に其變我しらば。歸て來つて其詳なるを糺しける所に。冢子セツハア我始として。親族も亦多く其徒黨となるのみならば。數百人ハ惡賊。類我以て相招き。既に深山に楯籠て。壘を築き隍を堀て。大石を運ひ。鹿砦（カキ）を結ひ。毒箭を製し矛槍我拭ひ。大守の討手に相向ひんに於ても。速に血戰をとげ。快く勝負我決せん有樣なりれれバ。ツキノエはらく思惟して。從夷の中より勇辨なるもハを擇び。彼をして演說なさしめて曰。凡人夷ハ世になる。各禮義我以て重しとせべし。人夷亦尊卑あり。福藩雜人若し法に背て。我徒を蔑如せんにハ。各其長なり。長に告て以て其命令我うくべし。長にして判斷なきを固より長ハ罪なり。況や其長に告ぜして猥てに藩人を害せる事。其主意如何なる故ぞや。是天命の盡る所。決して其罪を免るべからば。猶且つ天道

に背き人倫我かろしめ。攻撃を事とせるをや。古來よ
りして。福山大守の恩顧によりて。我徒米酒衣服の賜
を辱し。身に寒いることをしらず。烟草庖具鐵器の類
いるによりて。口腹の快きをしるものハ。皆是我徒の
先祖よりして。おのゝ其子孫に至るまで亦然り。男子
已に其賊徒中にいり盟て父子の誼を斷て。天道に背
くの徒と何ぞ共に天を戴くべき。冢子既に惡徒たり。
我何ぞ得て子とせんや。たとへ我一人にても骸を砂
上に暴し。汚名を子孫に殘せまじき本心なれば。一應
も其正道を告示する所なり。父子親族の愛情も是ま

でなり。乍去其黨若其惡をひるがへし。善道に歸せる
に於ても。我將士に乞て其發端の主意我建白せべし。
といへるにぞ聽居たる數百人の惡徒。忽ち前非我悔
い深山を出て。ツキノエ酋長が屋外に來伏し。相俱に
ノツサフ陣場にも至れるなり。是皆此ツキノエの勇
智不敵の爲せ所なり。然則其功最も大なりと云べき
なり。夷酋列像附録

又國後嶋ノツサフより巽に當る凡十三四里の廣方。
此地の酋長ツキノエと稱せるもの。奸雄豪富しかも
殘忍にして。身の長六尺有餘。腰のまたり十圍。面ハ南

海の朱玉の如く。眼を金鈴を並べ懸たるに似たり。鬚髪皆ひさをしきぎ。怒る時ハ。震ひ動くの奇術を行ひ。雨を呼び風を起し。木偶人をして能躍踊せしめ。以て遠近の蝦夷を威伏せしめ。居室城郭の如く。四方に隍濠をかまへ亂杭を結ぶ。

亂杭に用るもの。クトウシといへる魚の牙をもいて此。其の牙長六七尺ぞ。この里にして。圍七八寸なり。しかも堅硬にして火にやく事あたはず。利刀斷ぢさを得ぜ。百槌摧けさるもの有り。

たまゝ其勢を猜んで。他の蝦夷遠近慄し合せ。數千人を得ぜ。しかして攻かこむと雖も。亂杭一ト重だに破ることを得ぜ。しかして奇策を以めぐらし。是を敗走せしむ。故に皆ふるひ恐る。蓋東蝦夷總酋長となつて勢ひ當り難き者故に。近頃府使を以て服せしむ。北藩風土記

○豪勇　精一郎

釧路（クスリ）にメンカクシといふ乙名あり。名を精一郎と改む。此家に總領と生るゝもの一代に一度。釧路より亥方に當りて凡七日路をへだてゝ。根室領に隣ゆるマシウといふ高山あり。登ぼ凡五十町ぞあり。削峭千尋頂を馬の脊の如く。一歩をふみあやまたバ。數十仞の

谷底へ轉ひ落つといふ嶮山なり。此頂におひて必ず熊と勝負を決することなり。既に精一郎をマシウに頂にて。大熊に端（タン）なく出合しが。かねて覺悟のことなれば。身構へなし油斷なく持たる弓矢をおつとり直し。矢壺たゝへば射ばやしが。熊をことゝもなさば。まさく怒りかいはゝみて擘（サカ）んとなす我。精一郎を心得たりと身をかもし。熊の脊中へむらずと跨り。腰に帶たる短刀を手をやく拔て。力我極め拳も透れと刺たりやり。熊を手負て吼ず狂ひ。マシウに山の絶頂を足踏をづして。數十仞遥に下なるカムイトウへ。影かせませて轉び落ゝり。精一郎を當の敵を失ひて。本意なき心地のすなれども。初矢乙矢とも急所我たがへず。まこと短刀をて刺たるも。淺手にをはらざれば。轉び落たる所我索め。釧路へ歸りて誰彼にも搏たる驗を見せざれば。一代一度の功業空しく。且こたびの勳功も。水の泡となりぬめりとて。纍纍たる岩稜に手をかけ蔓にすがり。辛ふじて降ず盡し。カムイトウに邊我ゝかしこ搜しをとむ。（中略）まこと小田井某釧路領山中跋渉に時。積雪に深さ一丈をやあらん穴へぞ鼕（ドウ）と落（チ）たずれる。こまハとぞゝり夷人等を穴のほとりに踟躕（タメロウ）

うち。精一郎をおくれ駈にその所へ至りて見せば。小田井を穴の中に陷り。雪我かぶりて姿を見えば。精一郎を大に驚き携へ來たる滋籐の弓をとて。雪の間よりさし入せ。いで此先へとりはき給へといへば。小田井をおうといらへて。穴の底にて思ひけらし。よき折にこそ渠を引いせ。力のほどをゐめし見め。と弓へとろ手をかゝなぐら。力を極めて引入せんとなせを。精一郎を心得たり。さむさせじとしむしの間挑みしが。曳とかけたる聲とひとしく。鉾を片手に握ながら。穴の上にぞ引ぬかれる。小田井を其時莞爾と笑ひ。我

ぬやまて里ゆる勢のし。實を儞が力何ほどやぬる。ためし見んとなしたるのみ。決してのしくあれもあと里そといへむ。精一郎嘲笑ひやりがき年老いたりといへども。力業にて候へば。いまだ人にも讓るまじと。風雪の艱苦しのぶがたのが中にも。斯のごときたもむきをなして興じたるとぞ。東蝦夷夜話

○カニクシアイノ

唐太嶋シツカといへる處邊をオロツコと云て。其風俗大に異なるものども住み。それより奥に至るやルモウニクフン。といへる種俗有たるが。何きも靼風に

して有々るなり。かく種種ゟ夷人等をめる中ゟ。コタンケシといふ所ゟ。フヌプ名地を去りて二拾餘里の處ゟ有々る里ゟ。カニクシアイと呼ぶとの一軒有。その風俗をシリマヲカ住ゟタライカ人ありまゟ。此との身ゟ丈六尺余ゟして太く肥てたくましき男子。年ゟ凡三拾貳三才なるが。豪力無雙とのや。三人四人ゟて常ゟ漕々る小舟ゟ。只一人ゟて一挺ゟ車櫂をて漕よし。まゝ山獵ゟ好て山ゟ入るや堅雪中ゟて。獲とのあるまでゟ。何處と云ことなく驅廻り。十日ゟても廿日ゟても。山ゟ卧して少しも屈せざりしとうや。ウトイキといつる妻をとり。まゝエラクタケといつる妾を抱つて。その中ゟ子供八人を産ゟれる。そまゟ一人の老母の有り。都て十二人の家内残唯一人ゟて養ひ々るが。其働き業拾余人の所業ゟりとのや。依て此邊里ゟ住ゟるタライカ人。并ゟオロッコ人ニクフン。まさルモウ等の五種ゟ夷人等。皆隨ひ服せしめ居ることゟり。そまゟ就ても自らいひ々るゟ我在里なゞ。此邊りへ異國人等いつ斗り來るとも聊ゟ恐るゝことなし。若來りて儀をもゟし侍らバ。直ゟオロッコ。タライカ。ニクフン。ルモウ。スメレンクル。等ゟとの等。とト

ツソより奥に住家なしける。蝦夷人等残引連れて禦がん。と腕を撫させり。丑年クシユンコタン異國人等來りしが。其節彼の地の夷人等。皆その異國人等に僞はらきて。土をち運び家材の水揚等せるに役せられしよし。この島に居給ふ神の恥辱なりと云訇りて。クユンコタンの乙名。まさナヨロのシトクランケ等を。如何なる心ざしならんと嘲り笑ひ。かつは怒り等して語らゐふりけり。そのまさ薪残樵を取り水をくませ等せるを見侍りしけば。是は皆レフンオロツコといへるものゝ。三四人も來り宿し居てそれ等が皆致

し居りける。その傍に大なる家を建かけて有しが。是もみなオロツコとルモウ等残遣ひ。材木切出し建しとなん。我が手残取てその新らしき家のまゝ屋根なき處へ伴ひ行。江戸嶋國貴人來年來れば家造り新ら敷處で寐ろゝ。といと懇に饗し呉れるまゝ。我もそのさゝ泊ざしにめでゝ。天保錢手拭針等。取揃て遣しけるに。彼自ら製せしといへる弓一挺と。鷲を射るといふ矢二せぢに。熊を射るといへる矢一せぢ。を我に贐し。此邊の風土まさルモウ。ニクフン。スメレンクル。の人に。地理などを聞しきとゝ。クシユンコタンへ。一

度行しこと有れるが。彼運上屋の番人等の所置惡敷故。タライカ等を服せざる等のことと我。審にかたりけるまゝ。かくのおもときものを歸服いささせ置なばと。來春のシレトコ行の案内の事等。約し出立れるゆ。いと殘り多ずみ見送り出て。そのとてる荷もりをニイツイまでゐきけさせんと。レフン。オロツコ人を二人程遣し持たせ呉れたり。實に此との共等の事ぞ。皇國の威稜の赫赫として。鈍らざる證なりれるや。と是斗りを奥行中の諭快なまれる事とおもひしるし置ぬ。近世蝦夷人物誌

○ムネトク

東部虻田の持場所と。西部歌棄の持場所と境目の論有て。先その詰合〳〵の前に土人共と番人等。一應の處を取定め置樣との兩調役衆より沙汰あり。四月末の事とか。禮文華の小遣役カムイコレヤに。歌棄の乙名イトテレ共に兩方の番人等。附添て出來り。それにも此川筋を壽都の場所内へ落居り候事故。壽都よりも此ムネトク立合しとあや。其時歌棄の支配人出來す。呉呉も此黒松内の川我半分。此方に取す候樣にいたし呉度。左候時も上まし通行人も。此方より渡し守を

置て取るによろし。まこ黒松内の川にても。相應に漁
獵も有べしと。くれ〳〵其事を申聞かせしが。イトヲン
ト此事我支配人より申聞さましもの甚ご危ぶみ。ム
ネトクに先以酒一樽を携へ行。此度我も支配人より
如此頼まましが。是に負る時も如何にも支配人に申
譯立難し。左ゐるに依て我と已も從弟にて。代〻此親
類に因有るが故に。我に味方我致し彼黒松内此川端
半分。此方へ取り候やう致し呉よと頼みしかど。此ム
子トク大に怒り。是もよしなき事を云もの〻ふ。我と
おのれとハ從弟にてゐる事も知まこ事なれども。味

方を致せの黒松内此川を半分。此方へ取り候やう支
配人申聞かされしによりて。左樣致さねばならぬと。
左樣なる事も我ハ立難し。何故に支配人が左樣なる
事我申せしかば。斷もらざるや。都て此場所の事も土
人がものにて。請負人此支配人といふも此ハ。今日有
て明日にもかもるかも知難し。何ぞ境目等の事さう
此あゝのと云事なし。左樣非道の事を支配人がせ〻
むるとて。其を受合申募りて。カムイコンヤに云負け
なば。西場所の土人等もの知らぬも此と。都て西地
の恥辱に係ることなり。我も何程其方が味方を致せ

ゆうに頼み候とも。邪な事を云難しと。答へたまへる
と。
又當夏みさとなりしとか。妻死して後に後妻をせよ
とて。トノヤレといへる女み子を。支配人より勸めて
をたせへるに。此をの南部出生み寅といへる番人な
るをの密通し。今を其番人居ざれども。兎角和人と通
し候癖有て。如何とも致し難く。或時此をみ當所を出
奔致し他場所へ行。彼七貫（賤妓なり）をてもうらましと思
ひ出して行に。道にて捕ハれ送り返さましかば。其後
妻の首を押へ。小刀我以て鼻柱を切たまとかや。其疵

瘉たれども。黴毒病の如くなりしが。その譯を聞に如
此なし置かば。誰も人が手を附るをのなし。餘の處に
疵附る斗まにてを。瘉るや又人が手我附るとかや。頗
るおをしろき工風なりへる。同上

○トヒカライン

蝦夷實記に。寶暦中東部夷地釧路酋長トヒカライン
といへる夷人。福山に來て領主へ謁せ。頗る跋扈夷人
にて長き高く腰の圍み太く。鬚髪明らかにして。容止
甚さうるもしかりき。身にを紅錦を服とし。頭にを黒
天鵞絨に金紗の龍を縫重ねたる我冠り。進退徐徐た

るありさま。真に東部第一の僻をのなるべく見えたり。千嶋志料

○トセツコラン　ヤエタルコハ

石狩の川をぢの夕張といへるを。濱より凡四十里許山にして。其岳を沙流勇拂テーカヘツ邊へ跨り。頗る大なる山岳にして。それより落來る川なるが故に夕張といふ我。その川一筋に上夕張下夕張とて二ヶ所。夷人の部落する地有しが。文化前の處ハ其上夕張にハ。人口三百七十六人とか。下夕張といへるにを。四百九拾二人有し由なるが。追〻人口減じて今を上夕張

に二十三人。下夕張に四十九人。凡十分が一になりしが。其十分が一の人別も。今山にとてをなく。皆濱へ下が有。無人の境ともなり居る計りの事なるに。此所の産なるトセツコランといへるを。當年二十九歳。妻をフツシヤレと云て。是も同年。其弟ヤエタルコハ。是を當年二十六歳。妹シユツカウク二十一歳。四人にて山に暮し居たりしが。此兄弟頗る豪雄にして。脊高きこと凡六尺。常に弓箭を負ひて。夕張岳より十勝の山〻駈歩行。如何成年にても五六頭の熊我得さる事なく。鹿を平日の喰料まゝ着料なりしかば。云もさらなり

けるに。或時此兄弟れをの。山へ入終日獵しれるが。一頭の獲をのもなく。如何をせんと立歸ず來るを。夕暮方大なる羆壹疋飛出しれるに。兄トセツコランに向ひ。兩の手にてトセツコランを押へ。腰骨へかみはく處へ。ヤエタルコロ山より下ず來りて。其熊に一箭を附置き。直に山刀持ち熊に向へバ。熊まさ兄れトセツコランを捨置て。弟ヤエタルコロに向ひ。暫く組合れるが。ヤエタルコロ。おらへか孫。下へ志かきぬるや。其山刀我をて陰嚢れ處より股まで刺し通しれるに。召連し獵犬五疋。皆足にかみはきてかゝけるに。熊も是

みて大に力衰へ。横さまに倒るゝや。ヤエタルコロ直に上に乘りて留めをさし置。直に川へ下ずて衣を水に浸たし持上りて。其水我兄の口へ絞ず込。息我吹返さし置。緩々と其皮を剥ぎ是我背負。其上へ兄を置負て歸ず。其より家にてさま〳〵と療養して。助命せしとかや。然し其疵を癒難く今に腰骨突出て。腰を屈せるおともなり難く。まさ足我のむせ事もなし難し。面部を搦けて眼を飛出し。兩手我をて喰事我せる事斗ず漸く相成とかや。此兄弟にも深く我に附合しかば。能く此事を聞おもしが。實にきくを身の毛戰栗し。いと

危き事どもなり。近世蝦夷人物誌

○シヤケロク　サンケトモ

爰に東蝦夷厚岸の土人に。シヤケロク。サンケトモ。の兄弟なり。生質豪勇にして。頗る俠氣ありひとるものどもなり。おほが父サカモイナクといふもの。日頃愛して畜れきぬる栗毛馬なるが。夷地は野飼のことなれば。草我喰はゝ北手の山に居たりけり。なる夜遠くもならぬ山の後に馬の嘶く聲の頻にして。いかにもとの悲しげに聞えければ。サカモイナクは。おの聲我きゝつゝ大にあやしみ。近き所の夷人をいざなひ。馬の嘶きたる方をしるべにゆきて見れば。こはいかに日おろ愛せし栗毛の馬は。羆の爲に胴骨折られて死てゐたり。それを見るよりサカモイナクは。憤然として怒氣を發し。逃さじものと彼の羆を追ひかくる。つれなる夷人もおくれじと持たる弓に毒矢をはがひ。月の輪狙て射とめんとおもふ所へ。羆は走り來りて見るが前にぞ引裂たる。サカモイナクは七八反へだてゝ居るりしが。おの有樣を見てかなもぬ所と覺悟をきもめ。かの羆に撃てかゝる。羆はまもゝいかりて一ト裂になさんとする勢。こなたもおぼえの有もの

なほバ。右手ゐれば左手ゐ引除き。志ばしがゐどを
桃みたほども。馬さへ挫ぐ猛獸ゐ。透間もあらば掻立
らほ。何らハをりてたまるべき。悶絶なして倒ほれる。
サカモイナク此家ゐてを。やゝ時うほ歸りのゐど
のおそれれバ。をし羆のためゐ怪我もやしつらん。さ
らば今より山へゆきてゆうすを見むと。兄弟うちつ
ほ。外ゐ夷人等附添て案内しまたる山ゐ分け入り。か
なこおふこと尋ね見ほバ。無殘なるかな父サカモイ
ナクを。羆のゐめゐ掻傷らほ。血ゐ塗ほてぞ臥しゐこ
る。おれを見るより兄弟衆夷打驚きつゝ。かこそらゐ

寄つどひ。口鼻ゐ掌など打かざし。詳ゐ五體ゐ伺へば。
まゞ玉の緒をきれもをてぞ。人聲の耳ゐや入けん。お
こめきながら。虫の音ばかり此聲ゐ出し。そほゐある
をシヤケロクサンケも共ゐ來りしや。噫殘念なり口
惜。我が命數もこほ限り。おのゝ此力ゐたれみ。汝達我
が仇なるか此羆ゐ。いかゐをしく撃とめ。恨をもらし
くほよかし。しかしてまこ我骸をとりおくとき。羆を
下ゐなして埋めくほよ。そほを冥途の苞苴ゐせん。云
おくべきをそれのこと。其まゝ息を絶ゐれり。兄弟を
やゝあつて悲嘆の涙をうちもらひ。勃然としてたち

なのがり吁悲しひゝる。いさましの有さまや。ゝ祢て豪
氣は父御だに。かくもなしはる羆ハ。そも巨大のものの
とぞ思はるゝ。假令いゝかる羆にもなれ。父御は遺言
ハそむきがたく。直さま跡を追ゝけて仇を討ぜてお
くべきや。いざ來よサンケと兩眼に血戮そゝぎ。はつ
くと立て行かんとはるを。加勢に來まし夷人どもハ。
ゆゑんとなしゝ兄弟を左右に就ておしとゞめ。まげ
まことよいそぎなせそ。勇猛のきこえなるそなたの
父だに敵しがたき熊は。定めて尋常ならじ。その強敵
に向ひながら。此小勢にてはいかゞハせん。むとまげ

會所へ此よし戮告ぎ。松前カムイの役所へ訴申して。
其上に弓鉄炮の用意もなくてハ。仇なる熊に出逢ふ
とも。父御の遺言は果しもやらで。かへま討になりも
ぜバ。詮もなきまざにかん。兎にも角にも家に歸ま。母
御にも具に語まきゝせ。出なほしてはそよかんめは
と。衆議一決したりけれバ。事は始終を通詞利兵衛を
て。松前殿の役所へ訴出たり。松前殿詰合は人々は。こ
は趣をはむらにきゝとゞけて。夫々人數を増しなさ
へ。通詞利兵衛も共に再び山へおし出はに。兄弟をは
じめ許多の人數は。手々に得物を引提つゝ。しるべの

山に分入まして。かゝるさしあること捜し往くに。かの羆は
さはで遠くも立さらで。五六反ありて蓊欝たる茂林
の中に。三抱もやあらん椴の樹を小楯にかまへ。寄ら
ば搦んとする勢。夷人は四邊うちかこみて。逞ましき
犬を四五疋おひ驅たるに。夷人残力になし前後左右
より咬付人となすを。寄せたてじとあしらふうち。シ
ヤケロクは透間を孫らひ。オンコの弓に毒矢をはり
へ。ヨツ引てヒヨウとはなり。初矢あやまたず月の輪
に。羽ぶくらせめて射立たり事わ。これによつて流石
の荒熊も痛手なほぞひるんで見ゆ。其圖残はぞさば

弟のサンケトモは。乙矢をつけて矢筋たがへば。素よ
り毒矢の事なほば。そが身内へめぐりはん。たちも堪
へず七顛八倒。悩める所を。兄弟は持たる弓矢をから
まと打捨て。丸木をもて首尾をきらはば。力に任せて
うちしらば。熊はそのまゝ死してはり。兄弟は歡の眉
をひらき。今は報ずる父の仇二人の力に及ひがたれ
羆も。衆のたすすにより難なく討とめ。且父の遺言
もむなしからず。志残遂たりはり。おれもまた松前カ
ムイの御蔭なりとて。心地よけにぞ見えたりけると
ぞ。すべて蝦夷地は島獸をとまて狩物に出し。

狩物とは從來の蝦夷人。雪中の獵業に鷲をとらば其羽。熊を獲バ其皮并膽。まさ狐貂の如きも同じく。其皮を會所へ差出し。唯肉をのミ己等が食料とする事なり。其會所へ差出皮等を。都て狩物と稱す。多くハ輕の字を書ども。かるものハかりえもの〳〵義なるべし。

食料に充るをもて。皮残剥ぎ膽をとりて。會所へ出すならはしなれども。父の仇なるをもて。熊は全身を寸〻に剪刻み。遺言にまかせて父サカモイナクの骸の下に埋め。厚岸の景運山國泰寺乃捴持を道師として。跡ねすごろに吊ひたるとぞ。おは實に嘉永初年の事なりき。今その兄弟歳のほど三十を五六をも越たん。蝦夷に産せしものなぶら其性怜悧にして。よく内地の手振をもきまへ。言語に通じ。勇氣尤父の性を繼ぎたり。東蝦夷夜話

又安政卯年以來。東西は蝦夷地ふた〳〵び御領となりて。公より許多の有司達をはかれけれ。土俗をあらため。御國ぶりに化し申すべく。おほせごとありといへども。口蝦夷は兎角に拒み容せざる蠢愚はもの〳〵多かるに。却てはやく事情をさとり風俗をあらため。同

じき夷中我教諭するなど。御國人にもをけ〳〵劣らぬ所行。此彼皆御仁恤の溢る〳〵所と。厚岸の知縣。おらびに其下司なる吉岡某などの示教に出る所ならん。御領以前は。かの兄弟厚岸の東一里ばかり炭燒山に黜けられ。慨然として世我かこの胸の烟は。炭竈と共にふすぼる兄弟が。むかしき月日をおくまて居たる山の邊へ。知縣は折〻往て二人我はら〳〵見られ。意中に秘めて歸られけるが。其内二人のものを炭燒山より呼出し。役土人といふものにおなし給ハる。おゝ毋於て已前とは格段の身となり。兄シャケロク我酒六と改め。弟のサンケトモ我三五郎とあらため給ハまぬ。はゞ起て酒六を庄屋になし。弟我名主になし給ふ。おのは厚岸場所詰中彼らが母乃病に臥したると起など往て藥我與ふるをま。事に觸まて夫サカモイナクの物語。まさまさび兄弟が時得たるまとゞもを涙ながらに言出て。公の御處置我感佩おもを聞くがまに〳〵かいはゞおきぬ。同上

又厚岸の土人今改名して庄屋酒六。原名シャケロク年寄金太郎。原名クマキツ酉松岩吉等。髪樣言語も皇國風流に成て有ま。此酒六と云は。十余年前に。父サカモイナク山に

て熊に取らきし我。弟三五郎と兩人にて。妻子に生前に離杯取のもし。敵の熊を打取るまで。再び山我出まじと誓て山に入。數日其熊を尋。終に讐我報て腹を裂肉を屠まさりば。腸中にいまゞ親の鬚髭の有しを持歸りて。其我埋め厚く野葬に例を營し聞え有豪勇なる我。平土人になし有我。竹潭君此地に于役し。役土人とおし給ふおり。納紗布日誌

○義徒　ネシコマケ

厚岸酋長泥堀穀末決といふとに。弓術を能し。其威名東部に震へるものなり。去歳夷賊に密計我聽出し。こきを將士に告げしも。此夷人の忠功おり。賊夷に疑惑我解しめ。決斷なさしむるものも。此夷人の辨才によ る所おり。嗚呼夷中の卓識あるものか。夷酋列像附録

○マウタラケ

マウタラケもチヨウサマと倶に。東部ウラヤスヘツ總部酋長なり。此二人北嶋に騷動あるを聞く。强猛に夷人三百有餘人を擇で。賊徒若し西北部より奔逃して。韃靼地方に入んことをもとり。其間道幽谷に豪强に夷人我埋伏なさしめ。其不意を討んとす。賊徒進退に病めるとにも是が故なり。最も奇正の變をしるさ

云べし。同上

○シモチ

シモチハ東部厚岸准酋長なり。幼より射術を善し。智あまて且衆夷を服從せるの辨あり。故に將士より間諜の秘計を關り。夷賊の手裏に入て其密事を告ること屢なり。是乃ち國に忠なる所にして。其功勞も亦大なり。同上

○イニンカリ

イニンカリハ厚岸字バラサンの酋長なり。俠を以て夷中に顯れ。義烈も亦兼存せ。北嶋東方共に騷動あるを聞て。徒夷を集め先將士の未ざ到らざる。北嶋海陸の夷賊を討て。大守の厚恩を酬んが爲に。已に矛槍を礪き。毒矢を製して。專ら攻擊の用意をなせ所に。シヤモコタンの酋長ノチクサ是を聞て。諫て曰。大守より將士をして。如何なる令命あらんも計まがたし。然るに性急にして事をし大變に及ぶ時は。敢死夷の名を後代に殘さんこと豈惜しからぜや。といへるにぞ。義烈にして俠氣あるの夷人なほぞ。其言を聞て慨然として感服し。遙に將士の到れるを迎へてノツカマフに同伴せり。是歲七月二十日。惡徒數百人の群集せ

る中へ。分入て藏置たる兵器を探り出さしむるも。此二人が勇威による所あり。同上

○ポロヤ

ポロヤ者。東部別海の酋長なり。仲夏中旬變あるを聞て。厚岸のシモチと共に間諜をなして。國後夷賊の疑惑を解しめ。倶に引具せしの功あるのミならず。大ひに忠義を盡せしなり。同上

○イコリカヤニ

イコリカヤニは。北嶋國後の准酋長なり。此夷人も亦不敵勇猛の名あり。故に衆夷をして能く敬服なさしむ。固より弓法の妙を得たる事。北嶋第一なり。同上

○ションコ

ションコハ。東部ノカマフの總酋長なり。此夷人性質威ありて深智あり。又弓術に達し。山野の往來をいふもさらなり。近隣妾婦の屋といへども。歩行必ず弓を佩て其不虞に備ふ。百發百中真に夷中の甘蠅にして。其術弓を彀て猛熊伏す。夷人ことを恐敬すること神の如し。今字書に據れば夷字或ハ夸に作るも。東夷の大に從ひ。無頼の夷人も亦其仁愛に服せるなり。國後異變に臨てを。深山幽谷に群がり居たる夷賊を降

らしめけるも。偏に此夷人の智謀による所にして。國に忠あること眞に衆夷に勝れたりと云ひべし。同上

○ヤエケシユク

石狩の上川なるべゝツといへるを。チユクベツまたヒヽベツといへる。大なる川のならびなりけるが。此處の土人。ヤエケシユクといふを。當年五十二歳になるよし。其妻シユチロンといへるも。凡四十七八歳なりけるが。夫婦中よく暮らし。中にイルカレといへる十一歳になる女の子と。オカチヌといへる十歳になると。其また妹二人出來。また此子供等は。二ツ三ツの

時なりしとかや。濱にてアタマハゲたる。カボチヤと異名ぞ冠らせし番人に強姦せらるしが。此妻も此事ぞ怒りをもしども。番人のなせ事なれば。敢て致しやうもなく泣ゝも其心に隨ひ居たりしが。悲歎の餘り山に入て。自ら烏頭ぞ堀て喰て死し我貞操ぞ立しと。然るに夫ヤエケシユクも。子供等ぞ連て山へ歸り。當年若しも存命ならば。八十二歳に成りけるイルルイといへる母と。姉トアハ是も五十三歳なるよし。妹ムイトルマツ四十八歳のよし。弟シリマシナイ四十三歳。其妹トキサシマツ是も三十歳なると。家内をべて

八人此ベヽツ我立出て。ヒヽチクベツといへる山丘
我越。東地十勝北川をぢサホロといへるに行て。今に
住するとぞ。然るに五六年我過て。公料にかるると聞る
や否や。如此捨置てもと心附通辭增五郎といへるを
北。上川チクベツ邊の土人十人を連て彼地へ立越。歸
場所を談せしが。少しも聞入ぬぞ。其番人カボチヤ北
所業を一〻申訇罵す。歸る樣子も見えざりしかば。如
何共致し難く空しく歸れり。其後も種〻北寶をの我
持せて。まさくしきのし連歸るべきやう云含め。土人を
多く遣はせしに。其多く北寶をのを戻して。ヤエケシ

ユク云ゆう。命も寶にかへ難し。今にを石狩の處置改
まりなば直に歸らんと。其使の土人我笑ひ罵すて歸
せしとぞ。夫婦の義氣。實に筆や言に盡し侍るべきに
有ざるなり。近世蝦夷人物誌

○ケンヂロ

知床にゲンヂロと云乙名有れるが。此曾祖父セント
キも。寛政亂の時山より何知らぜ歸す來るや。和人に
出逢此亂を聞驚き。己の家の網北中に包み隱し置。家
内の者に計畧を云含め。一端徒黨の者に組し。密に厚
岸に到す。オツキニ婆イコトイ等と談じ。追討使北下

りを待て。叛賊を平らげ。後其和人を歸國せしめし事領主へ聞え。若干の褒賜ありし家ありと。知床日誌

○イコトイ

イコトイは厚岸の酋長なり。此夷人容貌異奇にして鼻に髻毛あり。其英氣衆夷に勝れ。好て常に長矛を横へ。能く砂石を擲つに甚妙を得たり。故に夷族彼を尊敬すること神の如し。亦北嶋の變あるを聞て賊夷急に逼らば。遙に極北の地より異國に逃れ避んも計ひがたしとて。從夷の弓術に達せる者數十人を擇び。擇捉ウルツプの二島に行しめ。各賊徒をし逃れ走らんにも。此二嶋にて。强賊船を夾み討取るべき用意せり。所謂勇にして且深智あるのミならず。國家夷民の丈夫たるものなり。夷酋列像附録

○シキシマ

西在なる相沼内といへるは。昔は土人等餘程在しが。近年和人の引越に隨ひて。追々と減じ今は二人ならでなかりしが。其一人シキシマといへるを此。隊長向山君シママキへ着せるや。玄關前へ來りて隊長の家來某へ言るは。此度蝦夷人等を和人となさるゝよしを聞侍りしが。至極それは宜敷ことにてあれども。運

上屋といへるをれを。それ我大に嫌ひて案じ過し。左様の仰候とも必なるおとなかるべしと聞せしが。然し此事我詰合へをらせことなかれ。若も洩はなぞ。嚴しく戒しむべしといひきかせしなり。依て夫をがいなむをれもあるべし。左候得共篤と申聞しなが。何はも悦ふべきおとゞもなり。我を相沼内村れをのなるによりて。何處の運上屋の世話にならざるが故に。國恩の爲に。ひそかに此一事を訴ふべしと云て告さり。いと殊勝の事なりれれがしるし置ぬ。近世蝦夷人物誌

○シマコタン

東海參譚に。白老に泊る葛西祐助を八王子同心にして。此夷地へ出役して家内引越し居る云々。其召使夷童をシマコタンといふ。祐助或時供に連行しが。會所にて其方を蚤多し。裏れ小屋に臥せべしといふ。此夷童我等を主人れ供なり。小屋へ行きならむ行べきが。をし主用有時を。面々勤め申さるべきやと答けはむ。會所れをれども其返答に困ずるよし。祐助の話なり。千嶋志料

○ノチクサ

ノチクサを。東部シヤモコタン酋長にして。强力衆に

はぐれ且智ありて。東夷メナシにも亦北嶋の變によりて。壘をかまふる所已に五箇所ありて。其黨近郷を往來して賊を集むるといへども。此酋長辨才を以て利害を說たるが故に。將士速りに其功を遂しとあり。夷酋

列像附録

○孝子　エタキウエン

西地筥前場所なる當時小使役を勤めたる。エタキウエンといへるは。當年五十歳にて。弟アヤエタクと云るは。當年四十二歳なると。二人は兄弟にして。自らはサケフンカルといへる妻四十四歳なるをもち。弟にはヱホロ廿九歳といへるを貰ひ。相互に當年は早八十三歳になるサケマシユンといへる其父。七十四歳になるセイスヽレといへる母を大切になし。自ら海まさ山等へ行時は。必ず弟を其傍におき介抱させ置。又兩人ともに外へ出る時は。已らり妻を傍に附置く。いとも叮嚀に孝養を盡し。其餘運上屋の申附等を少しも欠きとなく。能く勤め。此度公料に成ては。田畑をも開き候ゆうとは仰ことと有しりむ。其をも漁業の暇に勵みて。數畝は畑をは作り始め。元來酒は至て好物なりしが。其酒をも役で一椀を貰ふとも。老父と母へ

見せ。此酒は何故に貰ひしといへるにさを。言聞し等
してより呑むとおりと。一昨年は冬なりとりや。雪い
と深く降まし時。海くらく荒。一尾の魚をも捕るにと
なく。川々は皆氷張結て釣を垂ることもなり難く。ま
た括槍を刺せ穴もなりまし頃。其父生魚我望みしが
是を聞く。直に括槍我持て。コクンベツといへる川へ。
風雪我凌ぎて行たりしが。其河面厚氷にして。中々括
槍を入るべき所もなくはしが。詮方なく立歸らんとし
て。半道斗まも歸り來るや。北風いよ〳〵雪を釀して。北
海よりまいしくらに捲來る洪濤。坤軸も碎る斗まに

彼岸へ打上〳〵して。それ岸は下歸るも。今にも怒濤激
浪に曳とらる〳〵斗まなるに。其寄ま木は重まれる處
に。少し水溜まありしのば。其中にて何ら躍ま居たり。
其に走まより見るに。一尺斗りは比目魚二尾程。洪濤
に打上らせ有れるが。是我拾ひて取て歸まれるに。ま
せ〳〵風荒くなりて。其崩岸愈〳〵崩せて欠落たりと。今
少し遲かませば命危かましと。自らも話居たり。其餘
さま〳〵は事有ましも。誰云となく人〳〵知ま侍りて。去
年隊長源太夫殿は廻浦は節も。木綿并に酒煙草等を
此をのへ遣はされしとりや。また今年も鎮臺堀君此

ものゝ兄弟と。父母とをに呼出し。その孝心我めで給ひ。玄米酒煙草を。老養の爲に下し置きぬ。有難しとも尊としともいはんかたなかるべし。彼王祥の鯉も毛唐人の嘘にとならざること。是等にて審に志らき侍るなり。近世蝦夷人物誌

○コトレ

コトレは東蝦夷地釧路場所に領ある仙鳳趾に住る。土産取といへる役を勤むるチカフイと云。當年六十餘歳にもなまれるものゝ忰あるが。母死してより早十余年にもなりしとかや。妻はフイサクといふ。その中に女子二人男子一人を産て。夫婦中睦ましく暮し居るに。此コトレは性質直にして沉勇義氣有て。孤獨まこれ鰥寡の輩を。傷ハる志さし深ありしが。別てもその一人の父親に事ること厚くして。一椀の酒一匕の飯をも先親父に持歸ま。見さげしては喰はじとかや。其子供三人有て喰事の時は。物騷がしく致しれる我深く患ひ。何時にても親に食我勸る時は。三人の子供外へ連出し。必靜に食を勸むるよし。終りてその子供等へ配ち與ふるよし。其三番目の子供の産まし時とかや。如此にては自然親も疎畧にあるべくんぞ。外

へ遣ハさんと云し我。其爺が深く留め。漸に家にて育てしとのや。是等の外さはぐのことを我聞侍りしが。一々筆することを得ずして過しぞ遺憾なる。その至孝を厚岸の誥合喜多野某聞及び。深く是我賞し給ひしとのや。親の爲に子を捨るまでに及びしこと。誰一人孝と云る事我教へしものもなきに。かゝる目出度ものゝ出しこと。譬るにものなしとぞ覺えける。近世蝦夷人物誌

○コレマカ悴三人

宗谷領の内タツサブといふ所の乙名。コレマカと云

もの。老年に及び當時七十有餘歳に見ゆなり。コレマカ悴ピラタレゲ、スケサン、チコシナといふ兄弟共ハ。夷中にまれなる孝心のものにて。親コレマカ老年におよび。眼歩行も不自由なり。志のる我三人の悴ども。至て大切にとりあつかひ。食物等何品にても。先親コレマカに給させ。其上に家内のものたべるなり。三人の者。外の夷家に遊びなどに行こる節。先方にて何ぞ振舞。又は運上屋などへ來りし時。何ぞ有合たる給ものはかりたる時は。自分に決して食せず。先持かへりて親コレマカに進むるなり。其外朝夕至て大切に取扱

ふ趣聞えし故。篤と糺したる所。相違もなく。實に夷中にはめづらしき孝心のもの成故。其段官士木村氏へ申達し。御交易濟オムシヤの節。右コレマカ悴どもへ。別段下されもの有ゆうみいさし度旨申伸。米八升入四俵。麹七升入一俵。烟草四把。遣したり。日本地にてハ珍らしからぬといへども。實にいまだ道むら市ざは野鄙の極なる北狄の中に。かく孝行なるは奇特なる事ならぜや。夷諺俗話

○ベロ　龜松

東蝦夷國後島の夷人に。ベロと云もの有。畧工匠の事

我學び得たり。曾て嶋中のモンリーシケに居住せ。老母あり年七十餘。是に事て至孝なり。常に會所にて舟工としては漁事をせるに。その努力せる事衆中に過絶せり。而して其工事の賃。漁物の價も。是を已に取るさとあらぜ。或は酒に易へ。或ハ米に易へ。以て其母に贈る。寒烈の時と雖も。己が身にきる物はアツシ一衣に過ぎ。食ふ處は魚肉のみに過ぜ。身多病なりといへども。いさゝか其ゆゑをもつて懈怠せぜ。その勞苦甚ざはとめたり。嶋中の夷人も是を奇とし稱せるに至る。是に於て支配人某。通詞某。役吏に白して曰。凡夷人

此俗。物我町畦。父は子に頼らず。兄は弟に頼らず。唯老弱をしてハ。廢疾有て自ら渡世する事あたはざるに如きは。子たるとの弟たるとに。纔に其衣食を給するのみ。然ほどもおこさ以て念とおさず。夷狄の俗從來如斯。然るに今ベロ其母老ぜといへども。病困衰殘自ら渡世する事あたはざるが如きに非ず。而して其衣服飲食より微の經用に具に至る迄。皆是を贈かし。一も母をし求索せしめず。以て其身を安あらしめ。其心を樂ましむ。且身多病と雖も。軟弱を以て産業を廢せず。焦心腐腸以てその母を養ふ。實に夷人中に純孝と稱

すべし。願ハ賞贊してとつて其孝を顯旗し。嶋中の夷人をして親に孝あるに道我しらしめむと。是に於て夷人の酋長ならびに。島中に夷人を召て諮問するに。皆言ベロ親をうやまひ。産業をはとむる事。嶋中に夷人實に儔儷すべきとになしと。乃ちオムシヤの日に當ず。衆夷列座に中に於て。殊にベロを中座に引き。酋長を其列に座せしめ。通詞をしてベロが至孝を褒賞する意をいはしめ。綿袍一つ綿一つを下與し。今より後ましく其志をはぎ。老母に孝すべきよしをいひ。且酋長にも。嶋中に夷人ベロが如きもにあらば。速に是

を會所に白せべし。其餘嶋中の夷人をして皆ベロゲ行ひに效ひ。各其親を尊び養ひ志むべしなど。慇懃に諭したまへ。其明日擇捉の役吏近藤某の俱し來まし。厚岸の夷龜松といふもの。年纔に十二三なるより會所に來る。備賃をもりて。煙管品物類を買ひ求む。其志を推問せるに答ていふ。是を厚岸に贈り以て其父母に與ふと。蓋しベロゲ事に感じて。親を尊むの意を表せるなり。善にうけるの速なる。篤實の性愛せべし。夫れ夷人の朴質なる。豈僞て人の善を擬し。以て孝名を釣りもつて賞贊を貪るの姦計あらむや。實に善に倣ひ

んと欲せるの意。其肺肝より出るなり。是に由て之を觀れば。國家よく仁義の道をもりて。漸々に教導せば。夷人朴質の性。必其惡を去り。必その善にうけり。數年を出ずして。蝦夷の地悉く仁政に服し。おとゝく忠孝我尊ぶん事。それ猶置郵して命を傳ふるよりも速ならむか。蝦夷雜書

○アベハナ

東蝦夷地ウヱンベツの夷人。名我アベハナといふ。年纔に十四五にもやあるべき。されど漁事其餘の産業努力勉勵せり。衆夷の中にも一層目立つ計の事なり。

役吏某甚こ是我奇なりとして根室に置き。會所の使ひ夷と爲すべきよしいひたるに。遠く離れ居りたらんにも。親なるもの饑寒にせまれば。ゆるし給るべきよし。番人をして申出こり。未ご年若き子此外に行たらんとて。其父母の左此み困苦にいこる事。いうなる子細やあると問ひ尋ねしに。番人申するハ彼ゞ父ヤマコトイといふもの。愚魯なる上瘡疾なりて。其身此衣食さへ辨じ得ず。母なるもの。性至愚にして。纔に柴薪など取りてこぶのみにて。夫を養ひ子我育ふ樣此ちとにいこりてハ。いうにもある事なし。妹一人弟

一人なると雖も。いとけなくして。たゞ人此撫育を仰ぐ此みなりと。されば彼一人勞力して。日々に産業をはとめ。父母に事へ。弟妹を養ふ。家中此もの皆彼に依頼して。活濟の道を得たるなり。かゝるゆゑによりて遠く離れ行たらんにハ。家中此ものみな。手足を斷れし心地ぞいこすべき。されば彼辭し申處道理にて。養老といふも實。による事なりなむ。いみじきぬるまひにて。未ご十四五なるもの。かく此志なる事を。本邦の人とても多からず。まして夷人此中に於てをや。かゝるもの捨置たらんにも。いかむぞ教育此意にうなふ

といふべき。其事いよ〳〵浮きたる事にあらざるか。よく〳〵案問して申出よといひたるに。いかで浮偽なる事は候べき。凡夷人は俗。もとより孝といふ事も忠といふ事も。辨へしらざる中に。年とても多からぬものゝ。かく父母を養ひ。弟妹をいつくしむ事なと。實に千百人の中。一人もあるべしとハ思はれず。某などあねてしれる事にて候得ば。とく告參らはべしと思ひまうけたれど。事多き身は打忘れて。いまだ申出る事はあらざりしなり。あはれしかるべき褒賞したまはんには。夷人は勵しにもなりぬべき事なりといふにより

りて。さあらばいかでたゞには打おくべき。此ものに褒賞せんハすべき樣こそあるなれ。よは品物なと遣したらんにハ。たゞ一時は事にして。廣く其孝我顯はすといふべあらず。さまでバ彼は父母弟妹ともに根室にうつらしめ。彼は番人は下に附て。日に會所に往來し。漁事等は業をなして。長く父母に事へ孝心を全くせしめずには。彼も其志を遂るをよろこび。又國家孝を賞するの意も。廣く遠くあらはれぬべき事なりとて。頓て此事國家にも啓し奉りて。彼が父母弟妹も殘らず。根室にうはり居らしめ。殊に顧憐を加へたるに。

是迄は夷人ともうらやみはぞむもの多しとなん聞えたる。素より夷人朴質の性により。善事を見て是を倣ひ學ひ。孝子孝孫の多く出來る事ありなんにハ。實に國家仁波は餘澤。遠く夷狄は地に蒙るとおそもふもべけれ。同上

○孝多

釧路の土人にイカシカツといふものあり。今も名を孝多と改め給りぬ。おとし三十八歳。父もさきはとし病にて果にき。今母のウレルトのみ殘まて。齡八十を越えたり。孝多平生母にはこのふる事至て從順にして。

いさゝかも母は心に違ふおとなく。その日おろ妻并三人は子孫等にも堅くいひ聞せおき。おは迚稼に出る日も。妻を家に殘して母を護らせ。まこ妻は薪をこり。網ひきなどに出る時ハ。おは迚まこ家に居て母を介抱なし。夫婦はうちに一人も。寸時も母は側を離るゝ事なく。心をあはせて老母にはこへたり。たまゝ外のかこへ出なまといへバ。脊に負て何處迄もゆき。母歸らんといふまでも。附添ひ居て慰さめたり。もとより蝦夷人はならひにて。平生衣食は貯へもあらぬものなるに。此孝多も母のためにとて。衣も幾重か米も

精白に舂て貯へおきぬ。されどもおれまら夫婦もさ
らなり。三人の子供にも。敝衣麤食をいとはず。まこと運
上屋にて。はあはるゝにも。表裏なく働きれる故。此兩
人の舉止に感せぬものもあしといへり。安政辰年の
秋厚岸の知縣釧路へ出張いこされ。オムシャをおこ
なはるゝにはき。土人の日を追ふて御徳化に服從し
奉るを見らま。此時に當りてまり褒貶の沙汰をむね
とあはよしにて。兼て會所へ申付らま。土人男女老幼
とも。常に行狀の善惡詳に申出べくとなん。下司とて
三役のものとも一申付おかれし事なれど。此時始て

釧路土人イカシカツと申もの。老母にはあふる事の
次第を詳に申出たり。知縣も是我聞れさても得がた
き所行なるのな。夷中の類を異にして。斯孝心の者の
あるも自然にして。御領に愛たき事なりぞり。何ぞ申
出るのおそのりれる。幸ひ此節オムシャにはきて。土
人我殘りなく呼出し物をとらせる折から。彼孝子へ
も分てまこと申聞せる事のあまば。其趣を達せべしと
なり。既にオムシヤの日にありれまば。孝多も老母を
脊負ひて來り。妻ハ孝多の後邊にしこがひて。會所の
玄關前に蹲居せ。時に知縣も上座に在て。下司もて賜

物且御條目をたのらかに讀ひぐきバ。通詞是我請て其次第を達し終り。別に孝多を呼出し。通詞もて達せるやう。夷人に稀なる母に孝養の次第。尚常々妻子等へ申付方。神妙の至りなり。此よし箱館へ早々申上べきなきども。先當座は賞として。五斗入は米三苞。綿入布子三重袋。を取らせるなり。其の以後いよ〳〵怠る事なのれとなむ有れきバ。老母を始め孝多夫婦ゑこれ何事にか。並居る夷人は其中に。おのきらはみ米衣を若干賜ひきると。感涙を流し平伏してぞ居たりける。猶又通詞三右衛門ゑ。衆夷は方へ打向ひ。孝心は奇特なるをもて。斯は如く御褒美成下さるゝ旨を申諭しけれバ。御仁恤の肝にめいじてや。夷人なのらも低頭なし。そゞ泣に落涙して居たりけるとぞ。千島志料

○烈女　モレツシ

モレツシといへるゑ。當年廿八歳。西塲所天鹽は川上なるナイブトと云處は者にて。同所にシケロクといへる。當年三十七歳なる者は妻なりけるが。此ナイブトゑ運上屋より凡八十余里にして。十余日は船路にて上る地なれバ。一粒は米一服は烟草も。それ不自由いたん方なきが。七八年前なりしとかや。此シケロク

病に罹まて床に就し。其邊り一ヒ此湯藥もなきが故に。十日路餘なる處を。唯一人にて小舟に棹さし。毎(ツネ)に紡績せしアツシ等を持下す。運上屋へ差出し藥を乞ひ。是我持歸て夫に服さしめ。また肉食此み致しなば宜しかるまじとて。常に山に入まてを。トレフ(象山ト貝母)マ(延胡索)またをアンラコロ(百合の一種)等此も此を堀りてを是を與へ。今年にて早七と努になり。今を身體腐爛して二便だにも。此妻に助けられてゆきける斗りなりけるに。七とせ此間。少しも怠りなく看病を致し暮しけるに。今年此春此ことなりしとかや。また山へト

レフ、トマ、アンラコロ等我堀に行しかば。大なる熊二疋出來す。兒熊二疋を遊ばせ居れる處へ。此めのこ到すしや。其兒我捕へに來すしと思ひけん。大熊一吼して彼のめ此こに搦み懸すしを。少しも騷がず肩に取附きながら。腰より小刀我拔て。搦み懸すし腕我刺せしかば。一刺にして。其熊肩をたなし。五六間も退きけるとかや。然る時に。それ傍よす又母熊向ひ來るを。其めの志鉞へ横に柄を附。彼草の根を堀る具に拵へしを。振上ケ向ひしかば。二疋の熊其威に恐きをなしたすけん。何處へか逃去すける。夫よりめのこを。二疋此

熊の兒を捕へ持歸まて。家の傍に飼ひ置たり。いと貞しき女もかゝる時にも。心ざし猛く勇ましくあるものかと。尊とまれたるなり。近世蝦夷人物誌

○チキリアシカイ

チキリアシカイと云。老嫗ハ。北嶋國後の總部酋長ツキノエが妻にして。即イコトイが母あり。異變の頃も其夫と共に北嶋の嶋に在しが。歸まて來て賊徒福藩の人を殺害し。其貨財を貪ましたと我聞て。歎息に堪へず。殘居たる藩人舟子の輩を介抱し。且つ其夫ツキノエが爲に奇計我なして。倶に將士の命令をもつて。大に東部の強夷をなだめ。東部都て無事ならしめしハ。偏に此老嫗が功によれるあり。是歳老嫗六十五歳。夷酋

列像附録

○ウエテマツ

西地石狩川をぢなるトツクといへる處に住しれる。セツカウシといへるも。當年二十九歳にして。上樺戸の乙名を勤め居けるが。その妻ウエテマツといへるも。當年二十二歳にて。見目能く至て優くして。織繡の業我も善して。且常に勇氣あり。去る春も雪の上にて雌雄の羆が。まゝ兒羆に乳を吸せたる我追退け。その

兒羆を捕へ歸ましし事も有り。まこと今年も一疋我得こるよしにて。家の傍に飼有りたるが。此めの子番人某見染しより深く戀しこひ。その夫セツカウシの濱へ連下り居る時。セツカウシを漁場へ遣し置て。數度その閨房に行說しに。少しも承知せざましが。若我になびかざる時は。如此目見せんとて。度々漁場等へ遣り責使ハれしに。少しも屈せずして居こりたるに。後その男又閨へ忍び至りしのが。陰嚢をしめしとうや。番人の名は失念せしが。當辰年はその陰嚢痛みを發して。稼に下らざましとうや。依て當年は夫婦中むつまじく暮し。一人の男子我産せり。その番人の事を聞に種々の衣類等を持來り是我與んといひ。まこさもなき時は。責殺さんと云て。甚しき不法を申せしよしなるが。衣食は是にて足ま居りしうが。何の不足もなし。まこ殺るゝとも。何ら命はおしのらんと。少しもなびかざりしは。いと尊しとも譬るにものなし。此セツカウシは去年もスフシヤ越み召連しまゝ。今年もしだし連しのが。委く此事は聞置侍ましまゝ。しるしにくもの有り。近世蝦夷人物誌

○イムキマツ

東夷周覽に。國後の乙名にチヱシホツタと云夷人あり。妻をイムキマツといふ。此イムキマツ正直にして。よく人を愛す。故に此嶋の女子一人として。彼が詞を背くものなく。魚漁の時節。或は會所の雜事にて。夷女を遣ふ事あるに。イムキマツ事我傳ふれば。女子何人ありても。互に相勵み相助けて用を辨ず。故に會所にても彼一人に命ずれば。十人百人にも通ずといふ。廻嶋の有司至るごとに。イムキマツが賢明を感じ。引出もの をとらするなり。千嶋志料

○奇術　イコンラケシ

宗谷領モウベツといふ所に。イコンラケシといふ蝦夷あり。此者に法き怪談有。此夷海中の異形なる河太郎と云もの と契りをこめ。女の縫たるアツシの着もの我着する時は。散々に引さき捨るよし。此夷奇なる術をなす。アツシの反物などをマキリをもりて是我きり。そのアツシを桶へ入。しばらく何か唱て人にみするに。剪たる處もとの如くになり。また砂を手にてはらみ。手の中にて魚となし見するなど。又アツシを製するには。十日程も川にむたし置。その上にて苧の如く裂ことなるに。彼ものゝするには。川へもひとさ

げ。直に手にて揉に。自由によくはくなり。海上我船に乗り濱岸を通るに。帆もかけず櫂を掻ず。彼ものも艫に居て揖をとるばかりにて。船ひとりにてはしると云り。この一條も甚怪談にて信しがたき說なれども。宗谷通辭人のものがたりに。任せてしるに記す。夷諺俗話

○センアツイ

上略此術ハ狐狸木鼠蛇の類をはあふ事なり。西地にてハ志れをトモテといひて。むかし笘前場所にセンアツイといへる夷人。是我よく行ひしよし。今また宗谷の支配に一人有しが。此センアツイといふ者の術ハ。夜兩手の親指を合せ。是我繩にてしばらせ。左右の二の腕の所も縛らせ。脊中へ繩を廻しよく〳〵縛らせ置て。先燈を消し。何か口の中にて唱事をすると。坐中しばらくガサ〳〵と家の隅ぐまで。笹にて撫廻すやうなる音し。家内も震動して。すなはぐ物すごき事なり。扨明り我燈せと云に。燈我點ずれも。其縛りたる繩とけてあり。また燈を消して少し過ると。また已前の如く縛りて有。實に奇術といふべし。また近年宗谷といふ所の術者の常に咄すハ。自分を網袋の中に入てよく口我くゝり。臺所の板の間等へ打捨置て。扨とも

し火を消しけるに。其邊りにて何かがさぐと音しき
りにして。窓より何かはしらぜ。出入せるゆうに見え
けるが。しハし有て燈を點じ見たれバ。彼夷人突然と
拔出たり。それよりまた燈を消し。しバし有てまた點
じ見れバ。元の網袋の中へ入たり。其頃折〻此あぐけ
みをなしけるに。或時松前より勤番の人〻彼術者我
呼。網袋の中へ入。そのくゝまたる所へ。伊勢の御祓我
一枚結付置たるが。燈を消し見ほども。何分其袋の中
を出るまとを得ぜ。しバし有て見れバ。其儘にて袋の
中よりうなり出し。是よりは右のあぐさみをなさゞ

ましとかや。此夷人今に存命にて有。其後呼にはかハ
しけほども。決て運上屋へは來らざるゆうになまた
るとぞ。扨そほより後。唐太嶋にても勤番の人數の内。
小者一人行方しほぜなまし時。交易に來まし山且人
我呼て。その行方を占ハせしに。是も家の中に有てと
もしび我消し。しバらく坐して居る時。窓より何かは
しらぜ出入せるゆうに見え。また家鳴いざしぢりぐ
と音して後燈を點じさせ。扨云ゆう是ハ必ぜ絶命し
たり。何をど尋ね給ふとも しほぜと云しが。果して其
行方を見出し得ざりけるなり。總して此地より山且

此地のもの。如何なる術ゥハしらざれども。かゝる妖術ゆうれことゝ我なき事有。宗谷此番人話しけるハ。五十年許も前此事なりしが。此處此支配人イコシフケシといへる夷人有しが。此者何の術をつゐふゆらん自ら云に。我は海中に契里我しむるもの有と云しが。女此縫たる緦狹(アッシ)我着る事を甚禁し。男此縫さるのみ我着しける。人ふしぎにおもひ。試に女の縫たる我與ふるに。よく是我知里て小刀をもけて小さく切。桶へ納しばらく何ゥ唱へて。人に見せるに切さる所元此如くなり。また桶此中に小砂を入手にてもみ其中より魚類を出し。緦狹を製せるに十日も川にむこし置。其上にて苧此如くにさく事なるに。彼者は川にもひこさぜ直に手にてもむに自由にさけるなり。海上我船に乘行に。帆もなく櫂も用ひぜ。艫に居て楫を取て船をゆるしとも有しとぞ。如何にも解しがたき說とはおもへども。現に山旦人此白主(シラヌシ)にて行ひしを見ては。疑ふべきにもなかりけれバしるし置ぬ。蝦夷葉那志 夷諺俗話同

○ケブチカ母

イブミスと云は。譯して六百聞と云事なり。當子年御

救交易は事なるが。宗谷はメノコ二十二人連にて。宗谷場所の内マスホヽ孔山にくへ。姥百合をとりに行たる。姥百合を夷言ツレプといふ名にて。其根は食料とす。それをとりに行し中に。宗谷は乙名レウテヱレク妹。宗谷場所はうちシルシといふ所の乙名。リイシヤンダと云もはゝ妻の外に。同行のメノコ一人。都合二人は行方しれ祢バ。殘二十人は者ども。山中を所〻かゝく。さがしぬれどもたげ祢ばたらず。されによりて已事を得ず。皆〻歸る餘所はものどもへもあしれるにより。その翌日より宗谷のアイノ。メノコ等。大勢にて山〻を尋祢に出たり。右シルシは乙名リイシヤンダも。此度唐太見分と一所に彼地へもさり。留守の事故見當らず。この時會所の働夷ケブチカと云者の母。イブミスといふ事をなす故。小使シラクトイ。右ケブチカの母にイフミスはうらなひを聞れるに。其母答れるハ。昨日より能〻イブミスを考へたるに。是も氣違なることにてハ有まじ。熊にもとらまず。隨分達者にてあるなり。されハ餘り山ふかく道にふゝまよひたりしが。今ハ餘ほど山を下りてしばらく留り居るなり。尋ねに行たるものハ。今濱邊にゐて。その所と

そよほどへごゝを居るなり。留を居こる所よを。山上へのぼる體にたとふれば。眼の處へ出れば行合なり。押付行逢ふべしと云なり。此考は其イブミスをなしとのゝ。體のうちに音のしる所有て。夫を考て判斷をなし事にて。脊中にて音聞え。夫より頭のかゝへ行と聞ゆる。是我山へ登るといふ。かやうに體のうちの音を聞て。考うらなひを云事なり。遠沖に辨才船來るのも。右イブミスにてしり。行船の帆かげ沖にいまゞ見えざる先にかゝ迄も云なり。まゝ鯡の群來るをもしるなり。右行方しれざるし二人の女。三日目に漸尋當を。

無事にて歸を來れり。その者どもによくくたづねし所。右イブミスの判斷の通なりき。夷諺俗話并蝦夷葉那志同

○クウシユイ

西地笘前領なるフウレベツといへるハ。運上屋よを八里余北にして。元來漁業もなき處なりしが。通行の人〻止宿の爲にして。一棟の通行屋我建て。夏秋の間は番人を一人ヅヽ置て。是にて取扱ハしむるに。其通行の人の絶し時には。此番人等をも引取爲に。跡の番屋の守もなし。尚御用狀の繼立の爲にして。土人我一人置たをしが。此土人名ハクウシユイと云て。行年六

十二歳。妻をクレ子シと云て。當年五十三歳のよしなれども。未だ一人の子供もなく。只夫婦にて番屋の傍に細き流れの有に。春をチライ。夏を鱒鯇鮎雜喉の類のゐる我取す。またトママンラコロトレフといへる草の根。シヤクニヲといへる草の莖。欵冬蕨を干し貯へ。辛く浮世我過しけれるが。此クウシユイいかなる術有てや。上國筋まこハ松前邊より下り來る船の遲速等我問ふに。その日をさしたと神の如し。今ハ何の所に纜繫だ居るや。まこを洋中を颿す來るや等。掌中のものを指が如し。病者をトさしるや。生死の二ツをもの〻は。快かるべし。又何時頃ハ惡かるべし。と示しに少しも違ふことなし。まこ御用狀持として。筥前まこを天塩等へ行に。風波ある時を海岸崩れ岸有て通り難き所數ヶ所有。其節を上なる林叢へ廻り道をして行に。それ等の事も今日を上道がよろし。又を下道が宜しと教諭しるに。果てその如く少しも違ふことなし。まこ此もの〻が歩行しるに。闇夜の時ハ一ッの燐火燃立。その行先を照しよし。實に不思議なりける事ども。多かりけるとかや。然るに此術を蝦夷人等をシノチといひて。樂ミの中うに昔しより傳たりたる

術なりしとぞ。つまり耳馴れざる事ありしかば。加へ置ものなり。

按るに蝦夷地にて。シノチといへる事を。敢て此術の事にもあらず。歌ひ舞まゝ踊等せることをもシノチといへるよし。シノチとも慰めの事かと思ハるなり。土人等打よりて酒等呑し時。ひとつシノチを行れ等云事ありさてこの術も酒等呑し時。古しへも互に樂しみになせしかと考へらる。山靼人好み是を行ふあり。余弘化丙午年嚾哈嗹へ行し時。松前家の詰合なる。徒士山本周右衛といへるもの〻

家來重吉なるもの。七月七日頃あましが何處へ行去りしか。誰彼の差別なく是我探し求けるに。其居所しれざましが。同月十三四日の頃。山靼人白主へ來まれる。是にトさせれる處。十四日の夜の月の滯る頃あるが。白主の乙名ヲチラといへるもの〻家にて。火を消し暗らくなし。門口を閉ぢ窓斗りを明置く。暫の間低首して居しが。其家鳴動して今にも家も顛倒（クツルヽ）斗まにあり。窓より外を覗き見れば。空くらくして闇夜のごとくなり。何ものもしらざましが出入るさま見えて。如何にも身の毛戰き怪氣なる

ぶ。暫時過て。その山靼人首を上て火を燃し附るや。家も動き止みて。今迄外は暗かりしも。元は月夜となりて。何は事ならずしが。それ重吉なるものは是より二里許りの北なる。少〻高き處に行て縊死し居るなれども。如何許尋ね求むる共。其死骸は見附難し。然し日月過て後出る事有と申せしが。果して其よりも蝦夷人番人。并に詰合等日〻五日許も山野并に海岸等を探しれるに。終日見當らぬ過せしに。其骸冬少し雪降初てより。蝦夷人等薪取と山に入て漸〻見當りしせあや。余去年唐太へ行それ重吉は事を尋訪ひしに。右は次第はよし申まゝ。その山靼人は言少しも違ハざりし其術に感じぬ。近世蝦夷人物誌

蝦夷風俗彙纂前編巻三　終